

大学における親子とのふれあい体験プログラム —「おやこ de 先生の未来教室」実践報告—

○相馬花恵 (駿河台大学)
村野裕子 # (特定非営利活動法人子育て家庭支援センターあいくる)

宮岡幸江 # (特定非営利活動法人子育て家庭支援センターあいくる)

キーワード：次世代育成能力，親子とのふれあい体験，青年期

問題と目的

少子化の深刻化や児童虐待の増加など、子ども・子育てをめぐる社会的問題は後を絶たない。こうした諸問題の根底には、子どもとの接触経験が不足した状態で親になる者の増大や、親になることや育児そのものに対して不安を抱く者の増大が関係していると指摘されている (棚澤・福本・岩立, 2009; 大橋・浅野, 2009)。

こうした指摘を受け、今日では、親になる前段階にある青年期を対象とした次世代育成支援に注目が集まっている。具体的には、乳幼児とふれあい機会の拡充や、子育てに関する理解の促進など、次世代を育む親となるための取り組みの推進が求められている (厚生労働省, 2003)。

一方、大学教育の現場において、こうした取り組みを実施し、その効果を実証的に検討している研究は十分とは言い難い (金谷, 2008)。親になる直前の世代である大学生を対象とした次世代育成支援をより充実・発展させるためにも、大学における教育プログラムの実施とその効果に関する知見の蓄積が求められているといえる。

こうした現状を踏まえ、発表者らは、2018 年度より大学生を対象とした、乳幼児とその親とのふれあい体験プログラム (「おやこ de 先生の未来教室」) を実施してきた。本発表では、本プログラムの内容とその意義について、参加学生らの感想と共に報告する。

プログラムの概要

「おやこ de 先生の未来教室」は、埼玉県入間市にある NPO 法人子育て家庭支援センター「あいくる」が主催する次世代育成支援事業である。乳幼児やその親とのふれ合いを通して、子どもの発達や子育て期の親の変化等に対する理解の促進を目指している。

実施形態

学部 3-4 年生のゼミナールの授業の一環として、年に 2 回 (春学期, 秋学期に 1 回ずつ) の頻度で実施している。1 回の所要時間は 150 分である。プログラム開始時と終了時に 30 分ずつ時間を取り、プログラムへの参加に際する目標の設定などをするオリエンテーションと、その課題の達成度等を他者と共有する振り返りの時間を設けている。また、プログラム終了後には、「振り返りシート」

を用い、体験の振り返りと今後の課題の整理を促している。

プログラムに対する学生らの反応

ここでは、2019 年度に実施したプログラムに対する振り返りシートへの記述内容を報告する。当該年度のプログラム参加者は 18 名 (男子: 9 名, 女子: 9 名) であった。記述内容の分析には、テキストマイニングソフトウェア KH Coder (樋口, 2014) を用いた。なお、記述内容の分析とその報告について、参加学生全員から了承を得ている。

子どもとのかかわりを通して学び

まず、「子どもとの関わりを通して学んだこと」に関する記述内容を用い、共起ネットワークを作成した。その結果、「子どもによる発達の違い」、「子育て中の親の感情」等のグループが検出された。乳幼児とのふれ合いや保育体験を通して、月齢等による発達の違いに気づき、また子育てを担う親の感情への理解も深まったことが示唆された。親とのかかわりを通して学び

次に、「親とのかかわりを通して学んだこと」に感ずる記述内容を用い、共起ネットワークを作成した。その結果、「妊娠・出産時の親の感情」、「子育てにおける父親の役割」等のグループが検出された。親とのかかわりを通して、妊娠や出産に伴う感情は不安や喜びなど様々であることを理解し、また、子育てに際して父親に求められる役割等を学んだ学生が多くみられた。

自らが親になることに対する考え

「将来、親になりたいと思う」と回答した者は 14 名 (男子: 8 名, 女子 6 名) であった。その理由について共起ネットワークを作成した結果、「子どもへの肯定的感情」、「子育て生活の楽しさ」等のグループが検出された。一方、「思わない」と回答した者は 4 名 (男子 1 名, 女子 3 名) であった。その理由として、「子育てに対する自信のなさ」、「虐待してしまうのではないかという不安」等が挙げられた。子ども・子育てに対するイメージや虐待不安等が、「親になること」に対する考えの違いに影響していることが示唆された。

本発表では、大学における「乳幼児とその親とのふれ合い体験プログラム」の実践について報告した。今後、継続的なプログラムの実施とその効果を検討する実証的な研究が求められる。